

# 心の相続

「相続が争統になるかどうかは、生前のコミュニケーションで決まります。ですから、どう介護するか、どんな心の状態で接するのも重要です」。そう話すのはNPO法人シニアプラネット理事の板倉さん。お話を伺ってきました。



シニア世代の豊かな暮らしを守るサポーター

NPO特定非営利活動法人 シニアプラネット  
理事 板倉富男

私が葬儀社に勤めている時のことです。色々な方にこう言われたものです。「なぜ板倉さんは、故人に話しかけるのですか？」

当時、私は故人を棺に収める際などには、故人によく語りかけていました。故人は人です。人対人にコミュニケーションは欠かせませんから、私にとってはごく当然のことでした。

そんな私だから断言できるのですが、いかなる時でも、コミュニケーションは大切です。もちろん、介護の現場でも重要です。

介護に携わったことがある方は想像できるかもしれませんが、時折、お年寄りの中には頑固で偏屈で、周りを困らせる方がいます。そして、それが原因で色々な関係性が崩れていくことがあります。

しかし、それはお年寄りだけに原因があるわけではありません。介護する側にも問題はあります。お年寄りのわがままを一方的に受け入れる。まるで服従するかのように入ります。それも問題だと思ふのです。

コミュニケーションにおいてどちらかが我慢していれば、その関係性は必ず崩れます。したがって、お互いに接し方を見直す必要があるのですが、相手を変えることは容易で

はありません。ですから、まずは自分が変わらましよう。

自分を変えるのは気の持ちよう一つです。具体的には、ただ相手を友達と思うようにすればいいだけ。相手を敬いながらも、丁寧すぎない。冗談が言えて、笑い合える関係。そんな間柄を目指してみてください。

大抵の場合、お年寄りが頑固になつたり偏屈になつたりするのは、孤独感や閉塞感が原因です。子供返りや赤ちゃん返りという言葉があります。幼児のように、寂しくなつて駄々をこねているケースがほとんどです。

介護される方は、死者ではありません。生者です。あなたが寄り添う気持ちを見せれば、きっと応えてくれるはずですよ。

老老介護という言葉が示す通り、今や介護は若い世代だけが担うものではありません。全世代が担い手となりつつあります。

介護で培ったコミュニケーションは、やがて相続にも生きてきます。先祖から代々受け継ぐ家族の絆を、自分たちの代で絶やさないために。そのためには、日頃からもつと意識的に、コミュニケーションを大切にしたいところです。